

展覧会について

20世紀の「知」を象徴する人物の一人、フランスの詩人ポール・ヴァレリーはその著『エウパリノス』の中で、主人公の建築家エウパリノスに「きみはこの町を散歩するとき、町に群がる建物のなかで、あるものは黙し、あるものは、これが一ばん稀なのだが、歌うということに気づきはしなかったか。」、そして続いて「建物のなかで語りもせず歌いもしないものは軽蔑にしか値しない」と語らせている。

これはあくまで建築についての言説であり、崇高さやたたずまいなど様々な要素が内包されているが、その語り掛ける、さらには歌うというのはあらゆる優れた表現について通じていると言えるであろう。

密やかに語り静かに歌う木下恵介の作品だが、ときに饒舌になる。それを余白の饒舌性と言ってもいいのかもしれない。彼が見、選び取った対象が独り歩きすることなく、散文ではなく、韻文のように、現れた余白と表されなかった余白が不思議な調子を奏で、外の世界に流れ出す。ときに表現者たちは、何気ない、日常の美しい風景を汚し、傷付ける。それは自らの存在に対しても同様のことをしているのだ。しかしながら、木下の作品はそのようにはならない。それは彼の生来の資質であるからだ。そして、それによって紡ぎだされた世界はさまざまな想像の世界に私たちを誘う。今回、新たな生命の誕生を前にして、彼の作品はさらに言葉を生み、その世界に浸る見る側の人間を豊かなものにしてくれるだろう。

岡村 多佳夫（おかむら・たかお）／美術評論家